

娼妓
美談
夕離の花

分七寸三
寸五

コ
テ

ヨ
タ 紙 表

寸一
分四

コ
テ

ヨ
タ 梓文木

自序

媚妓の誠と。雞卵の

四角。あやう。晦暮と

大陰も顯々。誇人物

せん。其理と不究の

論可取の妄誕也

夫鳥のよ。木を撰ぐ

棲ぐも。木のとく鳥を

選ぶが理と。素各

遊女の程きとるく

獨室園。夜の處もこと

誇る。天を仰ぐ。哇々

仰ぐ。天を汚す。く

還る。己が面を汚す。老子の

不謂。その白を知く

黒と守の術を。り

軍。馬呼。傾城。小を

何。多。終。空。く

法。ま。が。往。ぬ。街の

列業。と。あ。わ。く。昔し

とら。杵填の主人

鼻山人誌

ひのとしのはつはる

自序

娼妓の。誠と。雞卵の四角。あれば。晦暮に大陰も顯と。諸ひ物せしは。其理を不究の論。可耻の妄誕也。夫鳥はよく。木を撰で棲ども。木はよく鳥を選ざる理り。悉皆遊才の。短きをもつて獨室閑。夜の長きを譏は。天を仰て唾唾に均しく。天を汚すして還て己が面を汚。老子の所謂。その白を知て黒を守る術を。おもふべし。鳴呼傾城には何なる。於客の。氣がしれぬ。街の別業におゐて。昔しとつた。杵填の主人

鼻山人誌

ひのとしのはつはる



歌章の宝晋藤
 其角の流台おき
 うゝひさやあはさやふあひり後と
 ゐりふんうりうきふふふふふ
 御月ふもさふふふふふふふふ
 せんのみふふ
 後章の自丘庵
 徳の名吟ふき
 うゝひさやあまうふてそかれむち
 あゝふふふふふふふふふふふ
 御月まの帳かきけのふれふふふ
 せんのみふふ

唱歌
小説

竹離の花

鼻山人著

○ 前章は寶晉齋其角が秀句
宇久爲壽や梅はさほどにおもはねど

本朝文粹卷の九。論文の中に。古えの
人いえる事あり。荆山の環美なりと雖
も。琢ざればその審とならずとは。實
なる哉。蘭委蕙質傾國の色と情の仲の
町。張と意氣地の大湊。人も志案の帆
かけて走る放蕩の風のまに／＼に。入
船のたそがれあれば出舟と急ぐきぬ
／＼あり。鉦を鉦す居結客。まはし生
敷の名代雛妓。夜船こぐかたはらに。
帆柱建て待わびしは唯木枕の罪なるべ
し。されば百ねんの樂も一睡の夢の中
に止り。生涯の望は四季折／＼の美景
に残る。離の花も散去て。
こゝに梅川がさしきには中のしま屋の客八右衛
門。羽織なしの装束表にて大あぐら。火鉢の

うへにゆき平鍋をかけ。大平の残物を入れてつ
／＼トにえてゐる。そばにはあひ方の梅川。
かたひざ立て火ばしをもち。灰をならしたり。
かきまはしたりして。すこしふさぎし作。八右
衛門は南京ちよくの盃を左りの手のひらへ
せ。右の手にて人さしゆびより。中ゆびくす
りゆび。小ゆびトにゆんにおやゆびで弾き。リ
ん／＼トならしながら。因宵にしま屋の
お仲間が一寸はなした節句の事も。
承知とはいふものゝ。忠兵衛といふ色
客のあるを知つ。むだな金を出すも。
駄子事かとおもへば。愚痴ほくいふ理
窟。團ぬしのうたぐりなんすも無理
じやアおつせんけれど。鳥屋のおかさ
ん。ぞつこんしつてゐなんす忠兵衛さ
んの事。一ツ茶屋からお出なんす主

かくしたとつて。直にしれへすこつさ
んす。よく察してもごらうじいし。ぬ
しだつても苦界のそア。もつてへねへ
ほど汲分てお出なんすものを。一ト通
りにおもひすくらゐなら。何も此や
うに打あけては申しせん。因自惚ら
しいが。迷た心からは。よもやさうじ
やアあるめへトおもつても。人の噂に。
梅川と忠兵衛は深ひ中トいわれて見る
ト。友達の手まへもめんぼくなく。一
チばん計較たのが。こつちのあやまり。
見切どころが肝腎とあきらめて見て
も。悪縁のかなしきには。是もやつば
り欺言かと氣で氣をとり直しては来る
やうなものゝ。どふも愚痴がいつた
なる。團ばかしい。それはぬしの廻
り氣ざんす。此間もいろ／＼とをわ
けておつせへすから。そりやアどふと
も主の心のはれるやうにいたしいしや
う。忠兵衛さんの事は。かならずさう

花の離

おもひなんしては罪になりいす。あらほまでに打あけて申しいた。ぬしが今夜お出なんすといふなんしたゆへ。先キとつておきいた。ト唐机の上のせてある西のうちの紙を。心にもねへ事を。とやかふといわれるほど。しみんつらひものアおざりいせん。トなみだ今宵を奮くやくそくが胸にあれば此とばをき。又西の内の紙を見て。もふく何もかも。愚痴ほい事はやめにして。まア一ツ吞事だろ。ト行平餅のふたをいつを煮つまりいたやうざんす。一寸すつておみなんし。此とき廊下をばた／＼トかめて来るしんぞう梅里。ごうじをあけて。里モシイあの祝筈をちよつとお貸しなんし。ト梅そこにあるからおもちなんし。里そして梅がえさんがおとづけがありいた。アム先刻の事をおねがひ申しんすツサト。いながら観覧をもつ

ていそぎ行。廊下万里アツツ梅ざとさん。うめへものか。里サア。おあんなんし。ト観望を興つたす。又お針衆のところへ豆煎の催促じやアねへか。壽館はわつちがはづみやしやうせ。里知つたかふ引行。これ豆いりをくつた口は。かならずそのにほひがするゆへにあとで館をくふ事なり。館はにほひをけす大妙薬也。万やたらとせばらいをしなげ。おゐらんへ。万里でござります。トいしながらはいり。次の間へ。八右衛門さま。御沙汰なしは。ちとおうらみでござります手。△ながらこつちへ来る時兵庫屋のまへで見懸たが。何かいそがしさうに。見ねへふりをしたゆへ。その事アこつちからいふとばだ。△ハハ。さうでござりましたか。それは悪入ました。尾張丁の出ばんで大キに酔いました。時におゐらん。昼間の一件はすみましてかへ。里まだすみせん。その事で

梅がえさんも。いつそ苦勞しなんすのさ。△モシ。八右衛門さま。どふも色男は罪が深ふござります。あなたなぞもマア御用心なされませ。△そんな事ア夢にもだ。チトあやかしてへもんだ。ト梅川が見を。里につこりつめりいすヨ。△アタマをそれ。ごらうじませ。そこらが用心をする所だ手。△おきやアがれ。サア一ツやらう。トよくを手ひら。△コレハありがたう。トいた。おゐらんのお杓とは。あまり結構すぎます。トひとつ。△紙いれのかみにひねつて。サアおさかな。△これは。兩の手に桃とさくらでござります。トいたぐ。今宵万里のこゝへ来るはおゐらん。梅がえさんも源太さんにやア苦勞なさります手。里女郎衆のまよつたのは。みんなあアしたもんでおつせへすヨ。△何に致ても。昼間のおはなしじやア。せひ今夜のうちにどふとか。かふとか。お花

言葉がそはすばすみますまい。櫛それゆへさつきから呼びにきこしなんすけれど。何もわつちが客人をひとり座敷へおき申て。よその客人の世話を致しいス譯もおざりいせんからまだまいりいせんのか。〔八〕梅がえさんがどふした。梅かうでおざりいすのか。簾屋の客人で。源太さんといふに。梅がえさんもおまよひなんして。内しやうへも度々／＼ばれて。旦那さんにまで異見をいわれなんしたくらゐなこつざんすのサ。それに源太さんが。すこし浮氣なことがおざりいして。新造衆のげび川さんとわけがおあんなんすといつて。やかましくいゝなんしたら。源太さんが疥癬を起しなんして。馳出しておしまいなんしたのサ。梅がえさんも。それじやアすみいせんから。簾屋へもそふ申て遣はしたところが。矢筈玉屋へおあ

んなんして。梶の葉さんをお買なんしたわけサ。そこで梅がえさんが。つけ斷のぬをおあげなんすト。梶の葉さんの所から。源太さんの事は。しばらく此方へおいでなんす客人ゆへ。人まちがひのようにいつて。そのぬを戻しておよこしなんしたのサ。その事について梅がえさんも。簾屋へだん／＼むづかしくおかけ合なんしたら。簾屋のごつさんが。わつちが所へきなんして。梅がえさんの事をおたのみなんしたわけさ。トはなすももとより嘘なれば。しまいのおきまりがつかぜいつまでいふてもはてしなれば梅川もこまりし様子なり。勿論まんざら形代のなきとにはあらず。密問此縣。動がすこしあつて茶やなどをよびにやりし事あれば。それへおねを、つけてはたしはやくこゝをぬけ田んのはかりなり。〔五〕梅川が話のおきま。モシおゐらん。そのおはなしを。しめへまでなざるト夜があけますせ。〔六〕いかさま。しやれ本一ッ冊ぶりはたつぶりある。ちつと

も早く行て。片をつけてやるがい。トいふも今宵起請をかきせる約束あれば。すこしもはやく用をしまはせてよぶつもりなり。〔七〕いつそ。つらうおざりいす。ふな身ぶりを見て立と。魂はいつ。ぢきにめへりかんとだところへ行てゐる。いすから。あんまり酒をおあんなんすなよ。トすてせりふを。〔八〕梅川が出てゆきしなよ。いつて出て行。〔九〕あとも見おくりて。あななざア。いつてハ深川のお世界だから。こちらへいらしつては。ものがてきばさいたさんで。まだるうござりましやう。〔一〇〕まんざらさふてもねへもの。こつちへ来て見ると。又こつちがよくなる。すめば都とやらで。近ひ所をすて、遠ひ所へ来るも。戀には身をやつすやつサ。〔一一〕なるほど。いかにます。それについて面白いおはなしがござります。ト扇をひよつばちさる所に穴十ばかりなおよぢが。老もんして。今といった事も直に忘れるゆへ。むすこがグット案じに。京傳が所の讀書丸一ト

包一匁五分。第一氣根をつよくし。も
のおぼえを能するといふ所から思ひ付
て。其親父に吞せるト。今までわすれ
きつて居た古ひ事までが胸へうかん
で來て。おれが若ひ時は。よし原も強
勢だつた。俄のとき。まづがねやのそ
の巻が。河津と股野の角力なぞは。き
もが潰れる。大かなやの自妙が。雨龍
の襦を着て仲の丁へ出るト雨が降た吉
野やの隠居の唄にやア。さすがの藤兵
衛もおそれをなした。小間物やの里八
が三味子といつて。たいこ持に出た時
分は。おれも中近江の内で大色事師と。
魂膽のいくたてをすっぱりはなすトむ
す子も親父の事なれば。よその人の聞
手まへもめんばくなく。余り不思議と
能書をよんで見るト。一切さし合なし
はどふでござります。〔六〕おきやアがれ。
さし合なしは。ありがて
ぬけ出でしんぞう梅ざとがねどころへござります

いたれば梅ざともそれとして梅川を解風の中
こまとりだしたむだ書のみをかいてゐる。これ
此屋敷のうちの合は。こよひ梅ざとが初合の客と
ばけてよりし。梅川が命。梅小ごへさぞ待ちど
ふなんしたらう。まらぬへはり。あ
す。恵かえ玉であがつたほど。心遣
ひのものアねへ。したが。あの東八が
これわが。よくのみこんで。床も小便所
のわきへまはしてくれたは。よつほど
ありがてへ。梅梅ざとさんと。いろ事
をしていゝすをしつておりいすから。
そこへつけこみいして。主の事を打あ
けてたのみにしたのサ。恩どふりで。
梅ざとも。おそろしく心遣ひをした
ヨ。それはさうト。まアふつとした張り
あひから。此よふに迷ふたも。悪あん
とはいふながら。今さらかんがへて見
れば見るほどはかなひ身のうへ。しつ
ての通り内は養子の事なれば。何かに
つけて異質だらけ。しんるいは一同に
親孫右衛門どのゝ方へかへして仕廻
と。たび／＼の相談。おふくゝひとり
不承知で。六ツの時にもらいうけて。
育あげた忠兵衛が事。實の子じやとお
もへば。腹も立ぬ。若ひものゝ事なれ
ば。引に引れぬ義理合で。金つかふや
うな事もあるものなれば。まづ／＼し
つても知らんふりとありがたいおぼし
めし。これほどまでにおもふて下さる
おふくろに。ついぞ。いぢどもやさし
い言葉をかけた事もない不孝な身と。
おもへば穴へもはいりたく。もふ／＼
此廊をばふりむいても見まひとおもふ
ても。思ひ切れぬ惡縁のかなしさ。身
で身をくふとしりつゝ。あはねはとか
くあんじられて。内にゐるそらはなく。
見世の帳面も手につかねば。一寸外へ
小便に出ても。からだかひとりでに。
こつちへ來るやうな事で。片時もわす
られねへ。梅川。かわいさうだとおも

つてくりや。桶もつてへねへ。ぬしを、おいでなんし。あの八右衛門づらのとそのやうな身のうへにしたも。みんなわつちが悪ふおざりいす。といふて。今さらこがれ死ぬまでも。おもひ切る事はどふもできいせん。それに此やうに。たま／＼お目にかゝりいす上からは。もしひよつと。どふいふとがおざりいして。これきりにでもなりいしたら。まアその時はどふしいしやうと。おもひすこせば。いつそ死にたくなりいす。此間も東八だんに内證をさういしたら。ぬしも二階をとめられなんしたといふわけでもおざりいせん。ぬしの勘定がさつぱり片がつきいせんから。そこで中の嶋やへ相談のうへ。そんならまづすこしでも片のつくまでは。かうなりいしたわけ。トきいて腹がたちいすが。此事をぬしもおいふなんす。東八だんの迷惑にもなりいすから。もふちつと蟲をこらへて

いつちやア。あの八右衛門づらばかりでおざりいす。

作者曰。梅川が忠兵衛にいろ／＼はかない物語は。これまでの通本にくらもありてめづらしからねば。たゞあたりまえ斗をしるす。此やうに互ひにおもひこむと。ほりものや起請はとるにたらず。女郎の顔を墨でぬり。又来るまで此なりで待て居よと。やくそくにたがはず。女郎は夜着をあたまからかぶり。めし給ふ禿にまで顔を見せず。癪かいたといふて。昼も屏風引廻して朋輩にも逢ず。三ッどの食事ちくはす。たゞその客の事のみおもふて寝て待て居るの類ひ。あるひは又いろ／＼なるものをかみくだいて。これをほき出して喰せるに。きたないと思はすくふ眞實があるやうになつて來ると。ついに身をはたすなだちとなる。おそる

べし／＼。

「梅」いつそ。あいだから風が這入て。さむくつてなりいせん。トしきをつてひ

「忠」どふもこれが因果だ。此ときハツ半のひく。やゝしばらくありて。梅「そんなら。

あすの晩はかならず格子までも來ておくんなし。忠「承知だヨ。梅「忠兵衛がかつて。しいつそ。こゝを離れてゆくが

かなしうござりいす。トほろりとこぼすひ兵衛が顔におち。忠「ぐちをいわすと。はやく

行て肝腎のものをとりはづさぬやうにするが。い。梅「かならずおあんじなさ

りいすな。あすのばんはきつ。忠「そんなら。その氣で。梅「格子まできつと。

トべうぶを梅ざとさん。わすれはいたしあけていて。梅「ばからしうござりいす。

トせうじをあけて見おくりながら下へ行。火入へ火をいれてもち來り。べうぶをあけて

消いしたろう。サアたばこをおあんなし。忠「ありがてへ／＼。かう。梅ざと

さん。おめへはまだ年もいくめへが。

此やうに心遣ひをして。しんじつにおもつてくんなさる心意氣が。泪のこば

れるほど。かわいさうだヨ。梅「さうおもつておくんなせば。お世話をした甲斐がおさんして。うれしうござ

りいす。忠「二かいでもあいて來るやうになつたら。きつとお禮はするせ。梅

「どふぞおたのみ申しんす。いゝ客人をひとりつれて來ておくんなし。忠「そ

りやアいわすともだ。トおきてしたくどふなんすへ。忠「もふけへりやす。梅

「ばからしい。まだ早うござりいすはな。忠「はやくねへと。内の都合も悪し。又

人目にでもかゝつちやア。梅「川までがなんぎになる。おめへまでも。うたぐ

られて益もねへ事だ。梅「それでも。あんまり早うござりいす。忠「ハアおれが

わりいとはいはねへ。ト頭巾にてかほをすつばりかくしはを

をさとられ。梅「おさらばよ。といふをきけに。忠「くゝ外へいで。ため。七ツのひやうし木息をほつとく。これ忠兵衛が如才なきしうちにて。此梅ざと若ひ者東八と。いゝ事の譯をきしゆへ。わざとはやくこゝを出立て。そのぬけがらのあとへ色男をいれせんはからひなり。こゝらがものを言ずして。人をよろこばせる心いきなるべし。ざしきへはいりヲ。まだおゐでなんしたかへ。阿「おゐらんのおかへりまでトついで長話になりました。時におはねおりはどふでござります。梅「あらかたすみいしたヨ。阿「それはおめでたうござります。そんならわたくしもちよつと梅「えさんの所へ。トきせるを。御機嫌よふ。トそこくにいとまごひしてたちいづ。これ梅川にたのまれてざしきのあいてゐるうちお働をし。阿「大に酔た。ちと寐やう。ト夜きを引。梅「おねかし申事アなりいせ

ん。あらほど酒をお飲なんすなと申しんすに。いつでもおきよなんせん。頭痛がいたしすかへ。もんでおあげ申しんしやう。因なアにいよ。何だかいつそ目がしぶくなつたやうだ。梅義理一ッべんでおかいなんす女郎だからさうでおざりいせうが。ほられた因果だとおもつておくんなし。

のうへにおきし西の内の紙をまくらもとへも来り。きやうだいの引出しからかみそりをいだし。八右衛門が目のまへにてくすりゆびの爪の下をおもひきつて切り。血のぼた／＼おちるを紅ちよこの中へうけて起請を書く。これを血起請といふ。又帯にて替く時はおのれが名のとこるへ血をつけるなり。又牛玉のうらへ替くときは名のところへ。「からす目のところとん／＼く血をつける。いづれも起請文の事ト書出しそれよりいろ／＼なる手まへがつてを書き出さずして。もし背かばあらゆる神／＼の郷名をしるして御ばつをかふむらんとしたむるなり。そもく此起請の嘘か誠を見わくるじんびの法あり。御ばつをかふむらんと書しはまことなり。又御ばつをかふむらんとした／＼めしは。みな

嘘なり。なぜといふに御ばつうとした／＼むれば文字にあたらざるゆへ。たとへ書きをよぶりても罪にならずといふとふ。諸客この心得あるべし。梅川が此時の起請も。さだめて御ばつうとした／＼めしにうたがひなし。始終のやうすを疑たふりして。見る心のうち。細のどし。

つた。節句もおれが仕舞つものに。しま屋へさういつて札をかけさせやう。又十五兩の金も。あした八ッ時分までには持つて来てやるから。まつてゐるがいく。梅夜ぎの中かならず見すて、おくんなすなよ。

たばこそすい付て出す。此あとの書き文付はたいがいお定りなればこれを尋すとやかくするうち。はやあけ六ツのかねボラン。中の梅屋のお仲ハハ八右衛門さま。おむかひでござります。

○後章は自在庵祇徳が名吟 麓やあまりにめで／＼こぼれ梅

玉兎昼眠雲母の地。金雞夜宿不萌の枝。花の五街の會者定離。悟れば何のへちまの皮も。迷えば憂氣身をやつ事。今さらいふも愚痴なれど。嬉しいはいとしさの初め。じれつてへはま／＼ならぬのおはり。待身なりやこそ疊ざん。

トねづみなきする梅川が座敷には新造梅はる掃除番の壳にさしづをして。おむらんのたばこぼんや何やかをふかせてゐるところ。はねたのモシイ梅へ。三味線番にあつた新造。はるさん。タアの新造三味線番はだれたのふ。はるたしか。あしかのさんだつけ。はね又こまがおざりいせん。はるあきれ

もしねへ。此間も叱られいたよ。もふ今月も七ッほど話とりいした。けしからねへ。よくあしかのさんをお聞なし。

トいふは、清撫をひくきみせんは。糸こまとも内せううけとるゆへもなくす時はその番のしんぞうがわきまへて出すか。又は内せうへさういつううけとるかせねばならず。よつて次の番へあたりしものへそろへてわたし。イヤうけとらぬといふ論。時々ある事なり。又家々によりて清撫のひきやうすこしづゑちがふなり。二上り。三下り。本調子あつてテンデミツンくくトひき出す内あり。又あたまからチャヤくくトひき出す内あり。又あつて見るべし。

引かはりて中。お仲。春さん。おはやくお身じまいが出来ましたね。はる。たつた今さんヌ。お仲。おゐらんはお湯でござりますか。はる。身じまいでおざりいすよ。

お仲。さふ申て下さりまし。たゞ今八右衛門さまがいらしつて。せひこあらへよんでくれろとおつしやるゆへ。おし

らせ申ながら。おむかひにまいりました。昼間の事でもござりますれば。どふぞいらつしやるやうに。はる。さう申しんしやう。まアッぶくおあんなんし。トたばこを出す。お仲。ハイ。ありがたふ。トいたいて。春さん。おまへのお客も。けのみながら。春さん。おまへのお客も。けふ八右衛門さんがつれてお出なしたヨ。はる。アノ。奴さんかへ。お仲。さやうサ。はる。いやだのふ。いつそきいたふうだよ。お仲。なにか氣めへらしいじやアござりませんか。はる。こしやうさんす。それよりやア。忠兵衛さんのつれて来ておくんなんした里風さんの方。が。しみくはれいた。お仲。あの客人は。ほんとふの息子株らうござります。はる。もちものや何やか。いつそいきでおざりいすよ。お仲。忠兵衛さん。今に又お出なさるやうになりますのサ。トきせるのすい口をそでの。まアまいりませう。さやうならおたのみ申ます。

トそこへしてたちかへる。ほどなく梅川身じまいもてき。衣のひを着かへて今朝内せううからもらいしおまんまの。さいのれいにゆく。其風俗。天桃の春を傷るよそはひ。垂柳のかせを含る容貌。たとへ漢の李夫人をゑがきし画工も。これを寫さば。ついに筆のおよばざる事を怪み。巫山の神女を賦せし宗(宋)玉も。これを讃せば。みづからこと葉の卑しからん事を耻なん。ト作者は筆をすてく衣しやうを着かへ。かむる梅二にもきかへさせどなくへれば。はる。今。しま屋のおかさん。が。来なんして。八右衛門さんがお出なしたトサ。おゐらんこちらへ来るやうに。とおつせへす故。おむかいにめへりいたといふなんすから。あとからと申てつかはしいした。どふなんすへ。極めへりいすめへから。いゝやうにいつておくんなんし。はる。けふはちよつとでもお出なんせはいねへ。かの理窟もおざりいすから。お仲。さうは思つてゐいますが。ひよつと仲の丁へ出

たと忠兵衛さんにしれいしたら。どふしいせう。はるばかりしい。それもやつぱり忠兵衛さんのためさんすもの

を。たとへしれいしても。腹をたちなんす譯もおざりいすめへ。梅そんならまア。一寸でもめへりいせう。ついでふ

兩といふ金を引とらんやうくそなれば。これよへにかゝる。剛様をよくそろえてほそきし帯をもつてこれをとめるなり。帯の中へはあふきをたてに入る。さて道中して茶屋へ上り。すはる時此こしおびを手ばやくとる。しんぞうこれをしまつて客に決して見せぬなり。そのしやうこは客とつれ立て茶を出るに。来る時のやうに兩つまをそろへてかへる女郎ひとりもし。みな兩つまのはしをむづとつかんで行。又ばをかけるゝ事あり。此時はその茶やぐとをよほど通りすぐて。アイトりむいてへんくときは。すがたにくつれて見にくしといふ。これ女郎のつねにくるがけるところなり。

梅川。梅ざと。禿梅二いそぎ中の嶋屋へいたる。これ一寸逢ふて直に歸

ん趣向なり。
梅中の嶋やへあがらんとする時。こ忠梅川が髯を

此ふんばりめ。トくらはせる。かんざしはる折て左右へとびちる。忠忠兵衛さんが。てとめる。ししやのていし天とんで。忠さん。これはどふしたものでござります。わきつれ行。お仲

おなじく梅川が手をつていそぎ二かいへあがる。きうに男にいゝつけて髪結をよびにやる。むめはるは梅二にいゝつけておむらんのかんざしをとりやる。此時見世には八右衛門。不通といふかみをあい手に酒をのみてふたりしが。梅川が忠兵衛にぶたれたるを見て。くわつとせきこみしが。めつたにこゝは口出しをするところにあらず。しらんふりをしてゐて梅川がやう

すをみると。ぐつ△お仲ばう。今の雷はよつぽどひかりが強かつたの。お仲

ならぬ。さやうでござります。トそばへモシ酒亂といふものア。こわいもんでござりますよ。△そこ。こつちが酒らん

ふりか。おなかななるほど。こつちが酒らん吉。ひて矢。たいこも方里きたりて。きうににきやかだなる。

種／＼の滑稽あれども。梅川の混雑あれは。これを畧す。
忠これにはだん／＼譯のある事なれば

いづれ晩までには来て。わけをつけやせう。△左様なら。さうなされて下さりませ。さやうござりませんと。八右衛門さまの前へたいしても。はなはだ御氣のどくでござります。忠わつちも男だヨ。わい。すて。これ梅川が仲の丁

へ出ざる約束を違し怒なり。疑心暗鬼を生ずるとは是非もなし／＼。折から若ひもの東△忠兵衛にわかれ。東八とつ八来かりしゆへ。△れ立。此事はだんまりにて。まづ／＼内へもどりみれば。ざしき藝者にて。大じやれゆへ。なに／＼わねかほでまかり出て。八右衛門さま。一ッてうたいいたしまし

やう。△サア。まつてゐた。トさかづる。此とき梅川が髯もてお仲八右衛門さま。ちとお二階じやれはどふでござりま

す。△きめうだ手。△二かいで二かいとしやれるがい。トどふもきめうでござります。トだしものをこけながら。はしごと上つて梅川を見。どふりで二かいへあがりたかつた子。

と竹／＼二かいへ上り又しやれとなる。梅川もこゝろならず。八右衛門もむめ川が心うたぐりて。

うきたるやう。^二めはしを。チト本ぶたいの酒

落として。おむらんのお座敷へめへり

ませうじやアござりませんか。^三それ

がよからう。^二かいのさはま

是より。八右衛門をさきへ立。不通

梅川。梅はる。梅二。げいしや筆吉。

ひで次。万里。若ひ者東八。しまや

のお仲。いづれもつきそひ。おもひ

／＼のしやれあつて。梅川が座敷へ

至るまでの道行くわしくするすも。

くだ／＼しければ。先を急ぎて略す。

^四いざ。ますこれへ入らせられませう。

^五しからばごめんだされ。^六ふうふ中

は。とんだむつまじいの。^七アイ。顔はう

つくしいが。どふも。やきもちやき

はこまりきります。^八ラヤ。ござうだ。

ト梅川がさしきへ。れつを正しする。八右

衛門は正めに大あら。わきに不通すこし

けて梅川梅はるトならびて又大さはぎとなる。

おい／＼珍味佳肴出て。あいあり。おきえあり。

おもひさしお手もとうしのかはりぬ。白

テツトンのわるじやれも。かんじんの

八右衛門がうかざるにきりあげて。

^九うたといつても此舞臺。かはらぬ

はなの顔見せや。中昇千秋萬歳萬歳と

ゆたかにこそはまひおさむ。^{一〇}おしい

／＼。折から東八る。^{一一}ヤット東印。

ちよふどきめうだ手。気がきゝすぎす

皐月の空。此御座しきをまづ片づけな

ますといふしやれサ。^{一二}黒かしこまりま

した。^{一三}お仲春さんの所は。いつもの八

疊かへ。^{一四}黒さやうでござります。^{一五}

^{一六}八さん。御手水にいらつしやりま

せんかへ。^{一七}いきたくつて。さつきか

らこらへてゐた。^{一八}ト立て。ひ

やうなら。小便所をこれへとりよせま

せうか。^{一九}ト引。^{二〇}ア、よつた／＼。よつた

はうから涙ぐみだ。^{二一}奇妙でござりま

す手。^{二二}ト

みな／＼どや／＼と。八右衛門につきそへ。小

べん所へ行。その内床がまはる。不通はす

行。筆吉ひで次。万里。お仲。八右衛門を日

出たく床へおさめて。ごきげん

よふといとまごひしてかへる。

^{二四}モシ八右衛門さん。さぞ腹がたなん

したらうに。よく堪忍してゐておくん

なんした。忠兵衛さんは酒のうへのわ

るい客人。どういふわけかしりいせん

が。あの通りの仕打。必ずぬしのお顔

のつぶれるやうな事はいたしいせんか

ら。さうおもつて。きげんを直してお

くんなんし。^{二五}はらの立のたゝぬのと

言は。さゝぬな事。仲の丁のまん中で。

梅川が忠兵衛にぶたれたを。八右衛門

が茶屋に居ながら見物してゐたうは

さされては。どふもこの廊へ面出しが

ならぬ。あの時忠兵衛と意氣地をみが

く事もしつて居れど。内しやうにどふ

いふ狂言がしてあつて。りつばに耻を

かゝせらるゝ事かとおもへば。めつた

に口出しもできず。といふて負けおし

みに。茶屋からすぐにかへる事もなら

す。いたばさみのけふの仕打。ありが

てへ御親切。一生わすれはしやせん。
 庵ぬしのおいゝなんすは。みな尤ざんすが。忠兵衛さんの事は。今申しすといふ。とかく酒をのみなんすといふ。人でも打ちなんしたり。新造衆でもいじめなんしたりなさりますゆへ。やり手衆も不承知で。もし怪我でもあつては。内しやうへすみいせん。嶋屋へも断。二階もとめられてゐなんすわけさ。大方そんな事を根葉にもつての仕打でもござりいせうか。どふもわけがわかりいせん。〔理屈〕といふものア。どふでもつきやすひもので。なんだか陋計にされたやうで。根つからうまらねへ。よしんば忠兵衛は。酒のうへが悪ひにしろ。おもふ存分な事をして心もはれやうが。こつちの身のうへはべらばうに駄子いやす。〔トだん／＼話がか〕十五兩の無心もわきのけとなり。節句のしまいもおぼつかなければ。梅川はこゝぞ大事の場所

と心をさだめ。原風のそとへ出て。鏡台の引出しより髪をりを出し。腰山の髷を根元へ。ぶつとりときり落し。べらぶのうちへ〔梅川が〕はいり。なんにもいわずに忍びなき。〔髪のみ〕てびつくり。此あたまはどふしたのだ。庵お歸りなんす道で。おすてなんすまでも。どふぞ持つてつておくんなし。〔又〕やり手にでもしたら。どふする。庵そんな事は厭いせん。〔八〕そんなら忠兵衛をつき出す心か。庵きれいつき出して。ぬしのお顔を立へす。〔八〕さういふ心なら何もかもいふ事はねへ。すつぱり。おれが世話をしてやるから。かならず苦勞にしねへが。〔節句の仕廻も呉服屋の注文も。おもふ通りにするが。い。ト朋衆から十五兩の金を出して梅川にわたす。〕梅川ありがとふござりいす。〔トつみみのまゝ。梅川益のうへに。〕なんぞまだ。自由なものがある。〔ト切た髪を束の〕

首でもとつたやうに。はな紙を出してつゝむ也。〔梅川もふしめたものとよあれさ。それじやア窮屈でござりいす。トあとはぼち／＼のはなし衆といまる所は。たゞいとし。かはいの二ツまくらに。しばし夢を。むすぶ。八右衛門が。通。きいたふの肌合にて。大みかにて来り。〔梅川の新造にはすこしそりがあわぬ風俗なれば。梅はるもよらずさはらず。おもしろおかしくちやうらかされて少し痒癢。コウ梅はるさん。いつ来て見ても。そば／＼ばかりして。下手の癖へた達アを見るやうに。さつぱり尻がすはらねへの。色事なら。輕ひうちに療治をしなければ。骨がらみにでもなると。一生の不具になるせ。〔八〕おあんじなんすな。わつちがよふな者にやア。だれもはれてがござりいせん。通はれてはあるめへが。おめへのほうからはれるのだから。しかたがねへ。此間まで挿てゐた。きのし屋で太平一ツ通用といふ簪も見へねへの。色男に借りられた

か。此とは甚だしいたはるして。なんとお
風にて禁句也。

つせへすへ。ぬしのやうな御如才のね
へ客人は。わつちらがよふな足らはぬ
大み世の新造を御買なんしちやア。ど
ふでお氣にやアいらねへのサ。此とは甚
なり。画きいたふうをいふなんよ。上
棲の下に名の書てある仕着を着るうち
やア。どふで座敷贅六に遣はれると思
ひなせへ。鉄將どぶの蛙雛子を見る
やうに。手も足もねへところが。おも
へ方のあたりめへだ。はるそらほどに
おもひなんすくらゐなら。お買なん
せんければいふねへ。ばからしい。通
こつちの腹の痛くねへ御振舞だから。
しかたなしに来るの。はるそんなら
ぬしア神で出なんすのかへ。はかね
へ身のうへだねへ。通もつてへねへ事
をいふなんナ。かみで来る客人があれ
はこそ。おもへ方のやうなもの。ま

ア寮所にまごつかねへのだ。地金を出
す客人が。おもへがたの齒にたつもの
か。そりやア所詮およばぬ戀だヨ。ト
しやべくつてゐる折か。梅はるさんへ。
廊下にて梅さとのこへ。
ちよつト。はる梅さんとさんお待なんし。
ト出て行あとは不通たひとりと。贅あそびのねる
にもねられぬ床の中まじりくしてゐると。
内證の。キリキリ。八右衛門は寝
耳にふつと。
ハサア。おそくなつた。トおきてした
庵たつた今七ツをうちいす。まアようお
ざりいすはな。ハタアの今日だから。
内がむづかしい。一寸來て歸るつもり
で。おそろしく手間がとれた。ころへ不
通も仕度。通ハ右衛門さん。もふ七ツで
ござりやす。なんだか日は短ひ。ハ
みちかいのじやアねへ。こつちのあそ
びすごしたのダ。梅はるの隣さしきにて得がる
たをとつていたりしが。不
通とハ右衛門が話。はるヲヤもふお歸りな
んすのかへ。あんまりあつつけねへこつ

さんすよ。ト聲の引だしより羽織
から。そんなら。おさらばよ。庵とふぞ。
かんにんしておくんなんし。ハせうち
だよ。梅梅はるさん。おたのみ申しん
す。はるヲヤ。どふなんしたへ。ハ通
はしじをを トンくくく。
實に。女の髪毛にてよれる綱には
大象も繋るゝとは此所なるべし。蜀
山の翁がそのむかし詠給ひし。夜見
世を春の夕暮は。入相の鐘に花やさ
くらん。トその香に愛てうかれ人。
右往左往の其中に。中のしま屋の暖簾を
患久しぶりで。おそろしく敷居がたか
いよ。ト上る。お仲ヲヤ。忠兵衛さん。い
らつしやりませ。患大ニは留守かの。
お仲ハイ。たゞ今一寸堀までまいりまし
た。患時にお仲ばう。今夜來たは外の
事でもねへ。これまで段々不義理に
したこつちの勘定。ちつとづゝも片を

付やうとおもつて。都合した端下金。

まアこれをとつて置いてくん。らとり

だす小判で十兩。さくく。お仲 ふしぎそんな顔
といわせてお仲にやる。

いた。ありがたふござります。たゞ今

宿で歸りますまでお預り申す。ト勝手
の方へ

むい。おさかづきをはやく。女ハイ。ト
鏡子

いづ。吸物の。お仲 お久しぶり。一ツめし

上りませ。悪いかさ一ツ呑やしやう。

ト酒をのんでゐる。ほどなく大介立かへる。女
房立て忠兵衛が勘定のをいつて。十兩の金を

わたす。大介立かつて行儀のそばにてあらた
め。はながみ袋へおさめ内ふところへ入て

天これは忠兵衛さま。唯今はありがた

ふ。風少しばかりで氣の毒ながら。あ

りッただけだ。大イエ。大にありがたふござ

ります。忠まだ一ツ言譯をする事があ

りやす。昼間の梅川が一件サ。よく／＼

考て見ると。こつちの内へたいして

も氣のどく千万。梅川がめへもめんば

くなさに。どふぞ逢ふて誤らうとおも

ふても。さしあたつて勘定の引あひが

済ぬうちは。まづ二階をとめられた。

トいふ譯ではなけれど。ゑんりよして

くれろと。至極もつともなたのみに。

よふ／＼と工面して來た今夜の十兩。

所詮足りはしめへけれど。すこしも

義理がとゞけば。まア相談もできよふ

かといふもの。お仲ぼう。さうじやア

あるめへか。お仲そりやアおつしやら

すト當りめへでござります。大いづれ

にも。ちよつと懸合てめへりませう。

忠善はいそげだ。早ひがい。大かし

こまりました。ト出て行。しばらくありて大

話してゐる。はるせいといふながら。忠兵

衛さん。よふおいでなんしたよ。さの

そばへべたり、せつねへ。ト胸をた。はや

とすはり。きながら。

くお出なんすように。おゐらんが。

さする。お仲 忠兵衛さん。さやうならま

ア。あちらへいらつしやりませんかへ。

悪いかさ。かうなつちやア。些とも

はやく。お仲 ちやうちゃんをつけなよ。

男ハイ。はるサア。お出なんし。お仲

さきへいで男に提。モシ。おはきものはこち

灯をさげさせて。

らに。忠タイ。忠兵衛が心の内は。け

ふ梅川が髪を切て八右衛門にやつた

る事を早くもしりて。かく計らひし

なり。およそ女郎に惚らるゝ時は。

萬事油斷なく。さきの心のうちを十

ぶん試し見抜されば。眞のいろ客

とはいふがたし。こちらの心を先へ

見抜れて。色事仕かけの手管にあふ

を誠なりと心得るは。大なるうぬ

ぼれなり。はるさきへ行て梅川に。忠ゆう

とはし。忠さきへ立て。梅川がさ。お仲 じぶ

はきものをしまつて。あよりおなじく来る。忠よくいらつし

やりました。忠久しぶりだの。はる

お茶をおあんなし。ト樂屋のちやわん

茶帳の上へ。忠 秋紗をとつてひざのわ

のせて出す。きへおき。茶をのむ。お定り

659

まうき
まな
さ
ま
籬の花後編

さと
う
く
み
廓宇久為寿

來寅の春出板

和

ほひ
あ
と

ま
り
ひ